小泉八雲のことども（続き）

根　本　重　熙

アメリカの詩人ホイットマン（Walt Whitman—1819-1892）

彼は十一歳で，小学校を退いて以来，法律事務所での走使，印刷所の植字工，小学校の教員，新聞記者，官庁の書記等，転転と職業を変え，一度も家庭らしいものを持つことなく，貧困と孤独の中でその一生を終わった。一八四〇年に彼が書いた随筆の中で言う。

私はロウファー“loafer”が好きでたまらない。あらゆる人間の中で，あの生え抜きで，いつも変らないロウファーに匹敵するものはないのだ。さて私がここでロウファーと言うのは，本格的の，“のらくら者”のことであって，今日十二時間も十四時間も働くかと思えば，明日は何もしないで，ぶらぶらするような，そんな気まぐれの怠け者を指すのではない。私が求めるものは，ゆったりと落ち着いて，いつも変らぬ哲学者風の無精者なのだ。昔の哲学者達は皆ロウファーであった。ディオゲネスを見たまえ。彼は樽の中に住んで，偉大なロウファー一家の本当の子らしく振舞ったのだ。

備　考：ディオゲネスは古代ギリシャのキユニク派の哲学者。上記の通り樽の中に住んでいたという。キユニク派とは，ギリシャ語のキユニコス（犬のような）から出た語で，犬儒派と訳されている。彼等は，世俗的な権威，価値，習慣，形式等を勇敢に無視乃至超越した。そして，反文明的，反俗世間的生活を維持した。当時ギリシャ全土を征服して，正に意気揚揚，地上最高の権力者となったアレクサンドロス大王は，ディオゲネスの評判を聞きつけて，是非会ってみたいものだと思った。ところが，この「樽の中の聖者」は大王の招きに応じない。そこで，大王自ら出向いて行った。ディオゲネスは，その時おそらく樽の中で，日なたぼっこを楽しみながら，衣服についている虱（しらみ）か蚤（のみ）でも取っていたのであろう。

「わたしは，アレクサンドロスだ。あなたが，何か，私にして欲しいことは無いであろうか」大王の好意的な質問に対して，哲学者は答えた。

「傍（わき）へ退（の）いて下さい。日が，陰るから」と。

その帰途大王は，嘆息一頻（しきり）の後で，「もし私が，アレクサンドロスでなかったら，あのディオゲネ

スになりたかっただろう」と呟いたとのことである。

この時の大王が受けた大きなショックは，複雑なものであったようだ。大王は，“樽の中の居住者”は，それが聖者であろうが哲学者であろうが，定めし，手もと不如意を託っているに違いないと思っていた（事実，全くその通りであったろうが）のに。自分は，大王であっても（又はそうであるから却って）それが不可能な，何事にも何人にも掣肘されることのない壺中ならぬ，樽中の天で，自由濶達な境涯を享受しているらしい哲学者を発見した。もし自分が大王でなかったならば，あのように振舞って見たいものだと，ディオゲネスを羨んだとしても，不思議ではないであろう。そこでは，前述の様に，最高の権力者も，一個の日照権？の侵害者を以って目されているのである。

以上の様なディオゲネスを，ロウファーの代表的人物として憧れていたらしいホイットマンの，唯一の詩集が“草の葉”（Leaves of Grass）である。1855年に出した初版は，12編の無題詩を含んだ95，6ページの小冊子であった。彼が世を去った1892年までに，9回版を重ねたが，その度ごとに，改筆，増補，削除を行ない，現在流布しているものは，4百編余の大部の詩集となっている。初版の巻頭長編詩〔後に(Song of Myself)“私自身の歌”と題した〕は，彼の代表作である。

ハーン先生のホイットマン論（東京大学における講義の摘録）

私が正直に諸君に告げなければならない事は，非常に偉い人人が，私の言わんと欲する事（ホイットマンについて）と全然反対の見解を取っていると言う事である。――“草の葉”に対する先生の攻撃は，単にこの詩集に対する酷評の代表的なものであるのみならず，その作品の短命を，誤って予言したものとして，「悪評嘖嘖」であるという（既述）――エマスン（Ralph Waldo Emerson—1803-1882)はホイットマンの書いたものは，米国で産まれた文学と思想の中で，最大のものであると言った。英国では，大詩人大評論家スインバーン（Algernon Charles Swinburne—1837-1909)は，単に大思想家大詩人としてホイットマンを誉めたばかりでなく，大層立派な頌（ode）の中で，次の様な詩句を以て呼びかけている。――

O strong-winged soul with prophetic
　　Lips hot with the blood beats of song,
With tremor of heart-strings majestic,
　　With thoughts as thunders in throng,
With consonant ardors of chords
That pierce men's souls as with swords,
　　And hail them hearing alone.

血を踊らせてうたう歌に燃え立つ予言者風
　の唇，荘厳な玉の緒の顫動，群雷の轟くよ
うな思想，剣の如く人人の魂を貫き，人人に
　呼びかけ，人人はただ独りそれに耳を傾け
るような，調和せる熱情的な絃線，
　これらのものを有する
強い翼の魂よ。

彼の著書については，次のように言っている。——

Sweet-smelling of pine-leaves and grasses,
　And blown as a tree through and through,
With the winds of the keen mountain-passes,
　And tender as sun-smitten dew;
Sharp tongued as the winter that shakes
　The waste of your limitless lakes,
Wide-eyed as the sea-line's view.

松葉や草の如く匂い芳ばしく，
　颯爽たる山路の風が
吹き渡れる樹木の如く，全巻翠嵐を帯び
　日光が射している露の如くに優しく，
米大陸の茫漠たる湖水を撼がす
　冬の如くに辛辣なる舌と，
海の水平線の如くに広い眼を備えて。

以上は，偉い人からの大讃辞である。ホイットマンを熱心に誉めた識者が，他に多数ある。それらの名の目録は諸君（東京大学の英文科の学生達）を愕然たらしめるだろう。ここに一つの珍しい事実がある。彼を誉めた人人で，この様な称賛を肯定すべき何ものかを引用し得た人は一人もいない事である。又一方で，彼は，宗教的な人人や，因襲を奉ずる輩の偏見に逆らったために，彼等から猛烈，不当に悪口を浴びせられた。非凡な才能を有する人で，彼を侮辱することも，誉めることもなくて，その真相を語り得たのは，恐らくはただ一人だろう。その人は，ゴッス教授（Sir William Edmund Gosse—1849-1928)。——イギリスの詩人，批評家，大英博物館司書等を勤め，ケンブリッジの教壇にも立った。——

私が，ゴッス教授の名を挙げたのは，私の取る立場に対して，幾分の弁明を与えねばならぬからである。私の立場から言えば，彼についての一切の称賛は，全く無意義であって，彼の上に浴びせられた悪口も同じく無意義である。彼は誉められるにも，悪口を言われるにも値しなかった。しかし，彼は多大の毀誉褒貶を蒙った。彼の名声感化の大部分は，彼に加えられた獰猛な批評によって挑発せられた反動によるのである。

第一に彼が成し遂げたことを考察して見よう。私は敢て言う。彼は詩と言う名に値する，いかなる物をも成就していないのだと。彼は一巻の書物を書いた。それだけに過ぎない。その書物は詩で書かれていない。その書物は散文で書かれていない。或る書物が詩でも，散文でも書かれていない場合には，それはあらゆる国語における，一切の文典に反して書かれているに相違ない。彼の書物は全くその通りである。あらゆる正確な表現の，作詩の，散文構造の，良好な趣味の，法則に逆らって書かれているのである。それだから，私は先ず，それは拙劣な英話であって少しも文体を成していないと言う事を諸君に告げたい。———

称賛と批難との間の巨大な落差

以上ハーン先生の，ホイットマン論を摘録して来たのであるが，先生の攻撃は，正に完膚無き

までのそれの様に読める。筆者は，ここまで来たところで，上記落差の巨大さに辟易しているところである。両者を同時に満足する様な説明を考え出す事などは，筆者の能力を越えているようだ。已んぬる哉。……ハーン先生の講義の摘録を続けて見よう。

Extracts from (Song of Myself)	“私自身の歌”抜粋
I celebrate myself, and sing myself	私は私自身を賛美して唄う。
And what I assume you shall assume, For every atom belonging to me as good belongs to you	そして，私が誇称する事を，君も誇称すべきである。何故なら，私に属する物は，一つ一つ同じく又君のものだから。
＊＊＊＊　＊＊＊＊	＊＊＊＊　＊＊＊＊
Stop this day and night with me, and you shall possess the origin of all poems,	今日私の許に昼も夜も滞在し給えそうすると，君に一切の詩の発端を理解させ天地の美徳を所有させよう。
You shall possess the good of the earth and sun,	
(there are millions of suns left,)	（まだ幾百万の別世界がある）
You shall no longer take things at second or third hand, nor look through the eyes of the dead, nor feed on the spectres in books,	君に最早他人の糟粕を舐めたり，故人の眼を通じて事物を見たり，書中の幽霊に栄養を求めたりすべきでない。
You shall not look through my eyes either, nor take things from me,	君は私の眼を通じて観察してもいけない。また私から事物を受け取ってもいけない。
You shall listen to all sides and filter them from your self.	君はあらゆる方面に耳を傾けなければならない。 そして一切の物を君自身から濾過せねばならぬ。
＊＊＊＊　＊＊＊＊	＊＊＊＊　＊＊＊＊
I am the poet of the woman the same as the man,	私は男の詩人であると共に，女の詩人である。
And I say it is as great to be a woman as to be a man.	そして，私は断言するが，男であると同様に，女であることは偉大である。
＊＊＊＊　＊＊＊＊	＊＊＊＊　＊＊＊＊

Walt Whitman, a kosmos, of Manhattan the son,
Turbulent, fleshly, sensual, eating, drinking and breeding,
No sentimentalist, no stander above men and women or apart from them,
No more modest than immodest.

ウオルト・ホイットマンは一つの宇宙だ。マンハッタン生れの男児だ。乱暴で，肉づきよく，好色で，食べ，飲み，繁殖している。
感傷家ではなく，男や女の上に超越してもいないし，又彼等から孤立してもいない。
慎み深くもなく，又慎みがないのでもない。

＊＊＊＊　＊＊＊＊

I believe in the flesh and the appetites,
Seeing, hearing, feeling are miracles, and each part and tag of me is a miracle.
Divine am I inside and out, and I make holy whatever I touch or am touch'd from,
The scent of these arm-pits aroma finer than prayer, This head more than churches, bibles, and all the creeds.

私は肉体も欲求も，よいものだと信じている。見ること，聴くこと，触わることは奇蹟だ。そして，私の各部分と付属物も奇蹟だ。
私は内外共に神聖だ。そして，苟も，私が接触するもの，又は私に接触を与えたものを神聖にする。この腋臭の芳香は祈禱よりも美わしい。
この頭脳は聖書や教会や一切の教義に優っている。

＊＊＊＊　＊＊＊＊

I am not the poet of goodness only, I do not decline to be the poet of wickedness also.
What blurt is this about virtue and vice ?
Evil propels me, and reform of evil propels me, I stand indifferent.

私は単に善を唄う詩人ではない。私はまた悪の詩人たることを辞さない。
徳や悪について，世人の突拍子な叫びは何事だ。
悪は私を推進させる。悪の改革も私を推進させる。私はただ無関心に立っている。

＊＊＊＊　＊＊＊＊

Who goes there, hankering, gross, mystical, nude ?
How is it I extract strength from the beef I eat ?
What is a man anyhow ? what am I ? what are you ?

そこに居るのは誰れだ。切望しつつ，無作法な，裸体のものは。私が食べる牛肉から，私が力を得るのは，どうした次第だろう。
兎に角，人間は何者。私は何者。君は何者。

＊＊＊＊　＊＊＊＊

I know I am deathless,
I know this orbit of mine cannot be swept by a carpenter's compass.

私は私の不滅を知っている。私のこの軌道は，大工のコンパスで掃蕩し得ないものと，私は知っている。

＊＊＊＊　＊＊＊＊

I know I am august,	私は尊いものと，心得ている。私は敢て私の弁護を試みたり，あるいは理解を求める様な労を取らない。
I do not trouble my spirit to vindicate itself or be understood,	
I see that the elementary laws never apologize.	私は宇宙の基本的な法則は，決して弁明しないことを知っている。私は有りのままに存在している。それで十分だ。
I exiat as I am, that is enough.	
＊＊＊＊　＊＊＊＊	＊＊＊＊　＊＊＊＊
Has anyone supposed it lucky to be born ?	世に生まれたことを幸福と思っている人があるか。
I hasten to inform him or her it is just as lucky to die, and I know it.	私は彼または彼女に急いで告げる。死ぬことも同様に幸福なのだ。そして，私はそれを知っている。
I pass death with the dying and birth with the new-washed babe, and am not contained between my hat and boots.	私は臨終の人と共に死を通り，新しく洗滌された赤子と共に生を通る。そして，私の帽子と靴の間に介在してはいない。
＊＊＊＊　＊＊＊＊	＊＊＊＊　＊＊＊＊
I know I have the best of time and space, and was never measured and never will be measured.	私は時と場所の最上等のものを持っていて，決して測量されたこともなく，されることもないであろうと，私は心得ている。
I tramp a perpetual journey.	私は絶え間なく徒歩の遍歴を続けている。
＊＊＊＊　＊＊＊＊	＊＊＊＊　＊＊＊＊
I have said that the soul is not more than the body.	私は霊魂は肉体に優っていないと言った。
And I have said that the body is not more than the soul.	また私は，肉体は霊魂に優さっていないと言った。
And nothing, not God, is greater to one than one's self is.	それから，いかなるものも，神でさえ，人間の自我よりも偉大なことはない。
＊＊＊＊　＊＊＊＊	＊＊＊＊　＊＊＊＊
Nor do I understand who there can be more wonderful than myself.	それから，私自身以上に驚嘆すべきものがあろうとは思われない。
＊＊＊＊　＊＊＊＊	＊＊＊＊　＊＊＊＊
Why should I pray ? why should I venerate, and be ceremonius ?	何故に私は祈禱を捧げねばならぬか。何故に私は尊崇し，また儀式を守らねばならぬか。

I find no sweeter fat than sticks to my own bones.	私自身の骨に付着している物以上に，甘美なる脂肪を私は発見することができぬ。

＊＊＊＊　＊＊＊＊　＊＊＊＊　＊＊＊＊

これを読んだ後に，私が最初に自分に向かって発する疑問は，「これは詩であるか」ということである。確かにそれは詩ではない。その点については，何等の異論も有り得ない。……

私は諸君がその中に十九世紀哲学の思想を現わそうとする，作者の真の努力を発見するだろうと告げねばならぬ。私は只単に厳密な意味の進化哲学のみでなく，エマスン及びカーライル（Thomas Carlyle—1795-1881）によって吐露されたような個人主義哲学をも指すのである。

これらの三つの新思想の形式が，ホイットマンの頭脳の中で尽く混じ合った。そして，彼の詩作の企は，その結果を語ろうとするそれであった。

彼の中に存する一切の善いものは，他の何人にも亦存在すると彼が喝破したのは，人生の渾一という新思想が真実であることを彼が感得したことを意味している。彼は神聖であると言い，彼自身の体臭は祈禱や宗教よりも優っていると言ったのは——甚だ卑俗な言い方ながら——彼自身は永久的で，只単に霊魂として永久的なるばかりでなく，肉体として永久的だと信じていることを語ったに過ぎない。恐らく彼はドイツの永久的循環の学説を聞いたことがあるだろう。——それは，一度起こったことは，再び起こらねばならぬこと。まて総て今存在しているものは，過去において幾百万回も存在しこたとがあって，将来にも，また幾百万回も存在するだろうという奇説である。この哲学には幾つかの形式があって最近のものは，ニーチェ（Friedrich Wilhelm Nietzsche—1844-1900)の哲学である。この学説には幾分の真理があるけれども，スペンサー(前出）及び他の思想家によって，同一という点については不可能だと考えられている。私が意味しているのは，こうである。全宇宙が交互に現われたり，滅んだりすると信じるのは，科学的であるが，新しい宇宙は，一つ一つ以前のものと全然同一だと信ずるのは，科学的ではない。彼が自己の神聖のことを述べているのは，次のような意味である。則ち，彼は肉体としても，永遠的物質の一部分である。だから，彼はただ僅の時間継続したに過ぎない宗教や信仰よりも一層神聖なのである。彼が肉体と欲求を尊敬すると言ったのは則ち，私達がこれらのものを抑制しなければならないにせよ，これらは只単にそのもの自体が善いばかりでなく，人間にとっての必要部分なのである。彼は禁欲主義に対して粗野な反抗を試みているのである。だから，彼は慎み深くもなく，慎みがないのでもないと言っている。彼の意味は，次のようだと私は考える。則ち，真に理性的な人にとっては，人の行為を区別するために，このような言葉を使用する必要はないのだ。慎がないというのは，全く馬鹿らしい事であるが，あまり慎み深いのも，また馬鹿らしい。彼は出来る限り力強く意見を示したいのである。「徳と悪について，この突拍子な叫びは何事だ」と言っている。その意味は，次の通りである。理知明晰な人から見れば，この世に悪が存在するのは，

必要と思われる。何故なら，悪がなければ善もなく，誘惑がなければ，徳もなく，苦痛がなければ，快楽もなく，闘争がなければ進歩もないからである。諸君は以前にこの哲学を聞いたことがあるだろう。ホイットマンは，善の詩人たると共に，悪の詩人たらんことを欲すると言っている。また彼は，人間は自身において一つの宇宙――哲学者の所謂，小宇宙――であると言う教訓を読んで，影響を受けたと述べている。彼は現在小宇宙だから，従来いつもそうであったし，将来いつもそうだろうと信じている。カーライルの如く，彼は自己を無限界の一部分であると認め，従って神聖だと信じている。彼は自己の確信を非常に無器用に，粗暴に吐露して，狭量な人物の宗教的感情を悚(しょう)然たらしめようとする。だから「何故に私は祈禱を捧げねばならぬか。何故に私は尊崇し，また儀式を守らなければならぬか」と質問している。彼より一層博大な思想家ならば，形式や人生の習慣もまた永遠的事物の一部であるという事を認めたであろう。実際他の個所では，彼もその域に悟入し得たことを示している。“私自身の歌”によって，彼は精神的自由の最初の歓喜――古い形式の思想に対する人間の始めての叛逆――を現わしている。彼は様様の新思想を寄せ集めて，怪奇を極めている。しかし，私達は大抵その由って来る処を識別することができる。彼が生死同趣と述べているのは，西洋人にとっては珍らしくても，東洋人には非常に熟知された思想を吐いている。彼は，東洋の書物まで行かなくても，エマスンからその思想を得たかもしれないし，カーライルから得たのかも知れない。しかし，私達は，彼が印度の吠陀(ベーダ)哲学や仏教の訳書を読んだことを知っている。かかる種々の思想を混ぜ合わせた場合には，その結果は随分驚くべきものであるが，少少忍耐して読んで行けば，大抵彼の意味はわかるものと私は考える。（以下省略）

1883年8月。ニュー・オリアンズ（New Orleans）にて，オコンナー（William D. O'Connor）宛の書翰

ハーン先生からの上記の手紙の中で，ホイットマンに関係のある部分を採録して見よう。

貴方の美しい小さな書物は，私の書庫の“草の葉”の刊本への貴い補遺のようなものでした。私はホイットマンを心密(ひそか)に嘆賞していました。そして幾度となく，公の印刷物にして私の意見を表わしたいと思ってもみたのでした。しかし新聞紙では，これは容易に出来る事ではありません。普通の新聞紙で腹蔵なく彼を賞讃する事は出来ません。新聞紙の持主達は，その新聞が，立派な家庭に入ることを忘れないようにと常に申します。かれこれ議論でもしようものなら淫猥文学を好くのは怪しからぬと言います。新聞業は本当に文学業ではあません。今日の新聞記者は，どんなことでも務めてやることを辞さないように余儀なくされています。（中略）

あの詩人の作物に，私は貴方が与えられるような高い評価を置くことが出来ようとは思いません。尤も貴方の批評眼の優越に関しては，私の心に少しの疑いもありませんけれども。天才者が第一線に立つためには，単なる創作力以上の大きな特質を持っていなければならぬと思います。

創造した物は美しくなければなりません。材料が豊富であっても，それは私を満足させません。粗金(あらがね)や磨かない宝石では満足出来ません。精錬され，そして不思議な奇妙な形に細工した黄金が見たいのです。磨いては刻面(ママ)のバラの花となし，或は，ギリシャ彫刻の巧妙を以て裸体の惚惚しい無疵な嬌態に変えた宝石が見たいのです。ホイットマンの黄金は粗金の状態と思われます。彼の金剛石や翠玉は磨かない状態と思われます。——"Whitman's gold seems to me in the ore :his diamonds and emeralds in the rough"——彼の偉大な詩の巨浪の轟音がなかったら，大洋の調音の合律性を持つ彼の歌の完全な抑揚がなかったら，ホーマーは私達にホーマーであるでしょうか。私は，そうではないと思います。そして古代文学の巨人達は芸術の厳粛な掟に従って，彼等の詩行を磨きはしませんでしたか。彼等の用語を鐫(え)りはしませんでしたか。ホイットマンの声は実際巨人のそれです。しかし，それは火山の下の巨人の声で——なかば息を止め，なかば声を出し——調節が出来ないために，ここぞと思ふ時分に吠え声を上げているように私には思われます。（中略）

貴方は彼を詩人と呼びました。そうです。彼は詩人です。しかし，その詩人の歌は，野蛮な古代の北欧詩人，又は深林のドルイド僧の即興的作物のようなものです。思想は宏大です。言葉は偉大です。しかし，呂律は無茶で，耳障りで，ぞんざいで，原始的です。偉大な作物が永続するように，それが永続しようとは私は信じません。——"I cannot believe it will endure as a great work endures."（前出）——その詩人は創造者だとは思えません。前駆に過ぎません。（以下省略）

以上ハーン先生のホイットマンについての，東大での講義の大要と，オコンナー宛書翰の該当箇所の一部分を採録してみた。それでも縷縷記述することになったが。同先生の同詩人に対する批評の触(さわり)は，前出の "Whitman's gold seems to me in the ore : his diamonds and emeralds in the rough" のところであろう。某評者は言う「この詩集（草の葉）はアメリカ詩の清冽な源流を形成するばかりではなく，自由濶達なアメリカ精神の代表的表現である」。他の批評では「ホイットマンがアメリカの民主主義を文学の世界に導入して，これを見事に形象化するとともに，革新的な無韻の詩を創造して，近代自由詩の基礎を確立した功績は，特筆に値するものであろう」と。共に傾聴すべき卓見であるが，上記の触との間に，前記のような巨大な落差や違和感は最早無かろうと筆者には思われる。いや，それどころか，該詩人の長所と短所を併(あわ)せて剔抉した名言であるだろう。

注：前出アレクサンドロス（Alexandros III—前356—前323）……ギリシャ式呼称，アレクサンダー大王（Alexander the Great）……英語式のそれ。マケドニア王でギリシャ，エジプト，アジアにまたがる大帝国の建設者。　（未完）

参　考　文　献

小泉八雲全集：（第一書房）　アメリカの作者たち／ハーンの世界：（田代三千稔著）